

## 論文内容の要旨

### 論文題目

# 思春期にある先天性難聴の子どもの様相

～難聴学級に在籍する子どものエスノグラフィー～

指導教員 大島 久二 教授  
東京医療保健大学大学院 看護学研究科  
2018年4月入学  
博士課程看護学専攻  
中村智子

## I. 緒言

小児看護の臨床において先天性難聴（以下難聴）のMさん（女性、20代）が「中学校3年間は人生で最も長く屈辱的な時間だった。中学校生活は地獄のような日々であった」と話した。思春期のMさんが経験した地獄のような日々には様々な困難が生じており、Mさんは悩み苦しみながら対処していたと推測できる。思春期は、誰もが自分について暗中模索する発達段階であり、特に難聴の子どもには想像を超えた困難が生じているのではないかと考え研究に取り組みたいと思った。

日進月歩する医療により思春期にある難聴の子どもは、言語能力や聴取能力、語彙力は補聴システムの進化に伴い改善していたが、音や音声を聞き取るという面では困難が生じていた。また、思春期にある難聴の子どもは、人間関係で悩み、心身症や情緒不安に陥り不登校を引き起こしている実情も明らかになった。さらに思春期にある難聴の子どもがアイデンティティを確立していくためには、相互性を築くことに大きな困難が生じている。しかし、難聴の子どもも自身がこれらの困難に立ち向かい、どのように対応しているかに関する先行研究はあまり見当たらない。苦難の道と喩えられた思春期にある難聴の子どもの困難と対処を具体的に明らかにすることは、心身症や不登校と表裏一体の状況で困難に立ち向かう難聴の子どもへの支援や看護の手がかりが見出せるのではないかと考える。

## II. 研究目的

思春期にある先天性難聴の子どもが、どのような環境でどんな困難を抱き対処しているのかを明らかにすることである。

## III. 研究方法

研究デザインは、エスノグラフィーである。なぜなら、難聴の子どもを特定の文化をもつ

集団とみなし、子どもの中で何が起きているのか理解するためである。データ収集は、参加観察と半構成的面接法を用いた。研究フィールドは、学校長の承諾が得られた関東圏内の難聴学級を特別支援学級として併設している中学校であった。研究参加者は、難聴の子ども6名（男児4名、女児2名、13-15歳）、子どもの母親6名（40代）、難聴学級の教員3名（男性1名、女性2名）であった。データ収集期間は、参加観察が2018年12月から2020年2月28日までの1年2か月であり、面接は2020年4月3日までの1年4か月であった。データ分析は、データ収集の初日から開始し、データ収集と同時に並行して進め、データ収集が終了するまで全てのデータのコーディング、分析を続けた。尚、分析は小児看護専門および質的研究を専門としている研究者からスーパービジョンを受け、データの解釈については必要に応じて研究参加者に確認し、信頼性と妥当性の確保に努めた。

#### IV. 倫理的配慮

研究施設の学校長へ研究の趣旨について文書を用いて口頭で説明し文書にて同意を得た。難聴の子どもに最も関わりを持つ難聴学級の教員に対しても同様に説明し、文書で同意を得た。難聴の子どもの母親には、難聴学級の教員の協力のもと研究の趣旨について文書を用いて口頭で説明し、文書で同意を得た。母親の同意を得た後、子どもに対しては研究者が研究の趣旨を平易な言葉で文書を用いて口頭で説明し、文書で同意を得た。全ての研究参加者に対して研究への参加は自由意思であること、途中で同意を撤回できること、それによる不利益は一切生じないことを説明した。本研究は、大学の研究倫理委員会の承認（教30-44C）を得た研究計画書に基づいて実施した。

#### V. 結果

約1年に及ぶフィールドワークで、観察時間は582時間50分、インタビューは62時間52分であった。

##### 1. 難聴の子どもたちの状況

難聴の子どもたちの状況は、教室で過ごしている難聴の子どもたちと難聴学級で過ごす難聴の子どもたちの様相に大きな違いがあった。教室で過ごす子どもたちは仮面をつけているかのように表情は変わらず、クラスメイトと難聴の子どもたちとの時間にズレが生じていた。一方で難聴学級における難聴の子どもたちは、その時の自分の気持ちのままに行動し、ありのままの気持ちや感情を表出していた。また、難聴の子どもたちは難聴学級の教員に対し特別な感情や態度を示しており、難聴学級を居心地の良い場所と感じていた。

##### 2. 難聴の子どもが抱える困難とその対処

難聴の子どもたちは、難聴学級以外の環境にいる自分を透明人間のように感じ、戦場であると捉えていた。また、難聴の子どもたちはクラスメイトとうまくやりとりできなかった

経験や聞き返すことだからかわれた過去があり、自分から話しかけることを躊躇い友達ができなかった。一方でクラスメイトも、自分が近づくことで存在を感じてもらうことを当然の如く難聴の子どもへ求めていたが、難聴の子どもたちは聞こえないことで後ろの存在に気が付きにくく、近づくクラスメイトの存在に気が付くことができなかった。

難聴の子どもたちは、補聴システムを介し聞こえてくる音をレプリカな音と感じ、その世界に苦痛を感じていた。しかし、難聴の子どもたちにはありのままの自分でいられる難聴学級という居場所があった。居場所という空間と、そこでの仲間の存在が難聴の子どもたちを支えていた。居場所と仲間が難聴の子どもたちにとって原動力となり、支えられることで突き刺さる困難を受け止め、ゆっくりと歩み寄ることができた。

## VI. 考察

### 1. 共在感覚を味わえず透明人間のように感じる

難聴の子どもたちは、クラスメイトと同じ空間で同じ時を過ごしているのにも関わらず、その場に自分だけが存在していないような感覚を抱いていた。難聴の子どもたちはこの感覚から自分自身を透明人間のように捉え、場の一体感を味わえずにいた。文化人類学者の木村（2003）は、一緒にいる感覚のことを「共在感覚 feeling of co-presence」と呼び、「相手と共に在る感覚」は、文化によって異なり、文化特有のコミュニケーション構造によって変化することを明らかにした。難聴の子どもたちが経験していた「ここにいるのにいないみたい感覚なんです。僕もここにいるよっていうのに。聞こえないから、みんなの中にいるのに一人でいるみたいな感覚」は、共在感覚を味わえないことで疎外感に苛まれ孤独感と戦っていた状況であると考えられる。

### 2. お互いに怖さを感じて近づけない

難聴の子どもたちとクラスメイトは、近づく怖さという感情が相互作用を引き起こし、お互いの距離を広げていた。近づく怖さの相互作用は、難聴の子どもとクラスメイトとの親密な関係性に何らかの影響を及ぼしたと考える。難聴の子どもたちとクラスメイトは親密な関係性を築く上で、お互いが見捨てられたようなネガティブな感情を助長させてしまっていた。これらの状況から難聴の子どもたちとクラスメイトは、相手との距離をとることで自分がこれ以上傷つかぬ様、自己保身を図っていたのだと考える。

### 3. レプリカな音と聞こえない事実が葛藤する

難聴の子どもたちは、自分の中でこのくらいは聞こえるだろうと理想としていた聴力と実際の聞こえてくる音に矛盾を感じ、その音をレプリカな音や雑音（ノイズ）という言葉で不適當感や劣等感を表出していたのだと考える。また、思春期という成長発達過程において中学校生活で難聴が関連する様々な障壁にぶつかり、難聴である自分自身を自問自答しながら難聴の子どもたちはアイデンティティを形成していくのだと考える。

### 4. ありのままにいられる心の居場所がある

教室で過ごしている難聴の子どもと難聴学級で過ごす難聴の子どもは、別人の様相を呈

していた。難聴の子どもは、友達が欲しいと願うも、「教室で話す人がいないからここ（難聴学級）で話が止まらない」と吐露していた。教員は、会話から子どもの気持ちを汲み取り、授業をしながら子どもに寄り添った会話をしていた。難聴の子どもは一同に「難聴学級は、自分らしくいられる唯一の特別な場所」と言い、難聴学級で子どもたちは、その時の感情や心情を吐き出しており、飾らない子どもたちの姿がそこにはあった。また、難聴学級は、難聴の子どもが過ごしやすい工夫が施されており、難聴学級へ皆「ただいま」と帰ってきていた。そして、どんな時も毎日難聴学級の教員は、「また明日」と難聴の子どもの見送りをしており、難聴学級は難聴の子どもたちにとってまた明日も来る特別な居場所であったと考える。

#### 5. わかりあえなさを繋ぐために歩み寄る

難聴の子どもたちが抱えていた困難は、わかりあえないことが起因していた。ドミニク・チェン（2020）は、コミュニケーションは、わかりあえなさを互いに受け止め共にあることを受け容れるための技法であると述べている。難聴の子どもたちは、わかりあえないことを困難と感じていたが、相手目線で困難をみつめた時新たな意味を見出し自ら困難へ歩み寄ることができたのだと考える。

### VII. 結語

- ・難聴の子どもたちは、クラスメイトと同じ空間にいても共在感覚を味わえず透明人間のような疎外感に苛まれ孤独感と戦っていた。
- ・うまくやりとりできなかった経験は難聴の子どもたちとクラスメイトとの双方に生じており、近づく怖さという感情が相互作用を引き起こし、お互いに自己保身を図り距離ができてしまっていた。
- ・補聴システムを通しレプリカな音を聞くことで難聴の子どもたちは、自分の聴力を感じ自分を模索し葛藤していた。
- ・難聴の子どもにはありのままの自分でいられる難聴学級という居場所があった。居場所という空間と、そこでの仲間が存在が難聴の子どもを支えていた。居場所と仲間が原動力となり、支えられながら時間をかけて困難を受け止め、難聴である自分にゆっくりと歩み寄ることができることが明示された。